

京都大学	博士（文学）	氏名	西井 奨
論文題目	オウィディウス『名高き女たちの手紙』におけるギリシア神話の諸相		
<p data-bbox="183 398 438 432">（論文内容の要旨）</p> <p data-bbox="164 439 1428 551">本論文は古代ローマを代表する詩人オウィディウスによる『名高き女たちの手紙』(Heroides)全21編のうち4編を取り上げ、それらの検討、解釈を通じて作品の理解に寄与しようとする。</p> <p data-bbox="164 557 1428 707">全体は序論、第1～4章、結論、補遺からなる。序論は作品の特質を確認し、これまでの研究動向を概観したのち、本論文の視座を提起する。第1～4章はそれぞれ作品の第4歌、第9歌、第12歌、第13歌の検討、解釈である。補遺にはテキスト、和訳・註が掲げられる。</p> <p data-bbox="164 714 1428 1021">『名高き女たちの手紙』の大きな特色は(1)エレゲイア詩形による恋愛詩の性格、(2)書簡形式、(3)神話の登場人物を書き手とすること、という3つにまとめられる。第1歌から第15歌は女性が思いを寄せる男性に宛てた単独書簡、第16歌から第21歌は3組の男女による往復書簡である。いずれも相手に対する自分の思いを成就しようとするところから、上の3つの特色に加えて、手紙の内容は説得の性格を有する。そこに起因して取り込まれるのが模擬弁論、なかでも、説得弁論(suasoria)の要素であり、そこでは語り手（ないし書き手）の性格にふさわしい説得の仕方と表現が求められた。</p> <p data-bbox="164 1028 1428 1335">こうした特色をもつ『名高き女たちの手紙』に対して、近年の研究が重視するのはintertextualな要素である。すなわち、同じ神話伝承を題材とする先行作品が展開や表現の点でどのように取り込まれ、詩的效果を挙げているかを考究する。その際に重要なのは、詩人が当該書簡の執筆時点を先行作品における物語展開のどこに置いたか、という視点である。というのも、その設定いかんにより、ある時点で登場人物が自分のまわりの出来事に向ける目を通して、物語を眺める一つの窓が読者の前に開かれると同時に、執筆時点以降の物語展開との関係において様々な暗示や劇的皮肉の効果が生まれてくるためである。</p> <p data-bbox="164 1341 1428 1491">本論文はこうした研究動向を踏まえて先行作品との比較に重きを置きながら、書き手の人物造形に焦点を当てた。手紙が詩的效果を挙げるとすれば、それを書いている当人の思考や感情が生き生きと伝わってくる場合であろう。そこからまたそれぞれの書き手に応じた各詩編の個性も浮かび上がる。</p> <p data-bbox="196 1498 1236 1532">以上、序論での視座の提起に続き、第1章は次のような解釈を示した。</p> <p data-bbox="164 1538 1428 2065">第4歌は英雄テーセウスの妻パイドラーが継子ヒッポリュトスに懸想し、思いを告白し、不義の逢瀬を求める手紙である。他にない設定上の特色として、(1)男女間の関係がまだ白紙である、(2)伝承からパイドラーの求めがヒッポリュトスに拒絶されることがあらかじめ分かっている、という二点が認められる。(1)からは、それまでの経緯や共通の経験に訴えることができないため、説得が他の場合にまして修辞に依存することが予想される。しかし、(2)からは、その説得はどれほど修辞を凝らしても失敗に終わることに決まっている。また、オウィディウスの詩作においては、長々と言葉を連ねたあとに、それがすべて無意味であったと分かるというような、皮肉と諧謔を混ぜ合わせたような表現がよく見られる。このようなことから、この第4歌では、修辞のかぎりを尽くしながら、同時にそれが失敗に終わらざるをえないことを予想させるような暗示的仕掛けが施されているのではないか、という仮説が立てられた。この仮説の検証のために、まず、第4歌が修辞理論に推奨される論法をほぼ忠実に取り込んでいることを観察した。次いで、エウリーピデース『ヒッポリュトス』との比較検討から、修辞に示される「賢しら」そのもの、また、パイドラーが思いを遂げ</p>			

るための論拠とした「利便性」がヒッポリュトスにとって嫌悪すべきものであることが推察された。そこで、第4歌はパイドラーの筆致の上に誠実な情愛をともしなわない口先の修辞による説得の失敗を描いたものと解釈された。

第2章は、不敗の英雄ヘーラクレスに妻デーイアネイラが夫の情愛を取り戻そうと記した第9歌を検討した。第9歌では構成上の大きな問題が二つ指摘されている。第1は、英雄がいま心を奪われているのは自分が征服したばかりのオイカリアーの王女イオレーであるにもかかわらず、英雄のそれ以前の浮気にもデーイアネイラが長々と触れるという点、第2は、媚薬と信じて夫への贈り物の衣に塗りこめたネッソスの血が実は毒であり、この衣を着た英雄が瀕死の状態に陥ったという知らせが手紙の執筆途中で届いたという設定であることで、第2の問題には146行以下で4度現われるリフレインという、書簡には似つかわしくない形式の使用という問題が付随する。その一方、第9歌では、一部指摘があるように、「噂」「評判」「名声」を意味するfamaおよびその関連語彙がキーワードとして機能している。そこで、上記二つの問題について、英雄の名声と汚名、英雄に名声を願うとともに名声をもたらず存在としての正妻デーイアネイラという着眼から再検討した。その結果、以前の浮気については、「不敗の」英雄が心を征服されることを「汚名」として強く印象づける（翻って、自分が妻であることが英雄の名声を高めると主張する）ために語られていること、英雄瀕死の知らせは、そのように英雄の名声に寄与していると自負するデーイアネイラがネッソスの復讐成就に手を貸し、誰も打ち負かせなかった英雄の滅びる原因となる、という「逆転」の状況をもたらしていること、それによって自負の崩れ去ったデーイアネイラは自身も命を絶つ勇気を示すことで、英雄殺害加担の汚名を少しでも晴らし、英雄にふさわしい妻であろうとするが、リフレインはそのようにデーイアネイラが事態の急変から状況を自覚し、決意を固めるまでの経過を刻々と追う形となっていること、を観察した。

第3章は、メーディアがイアーソーンに宛てた第12歌を検討した。第12歌では、自分を捨てようとする英雄イアーソーン（および、彼が妻に迎えようとするコリントス王女クレウーサと父王クレオーン）に対する復讐についてのほのめかしが見られる一方で、英雄に最初に出会ったときのような恋愛感情をまだ残している様子も窺われるため、従来の理解では、復讐を心に決めた姿を描くエウリーピデースの悲劇『メーディア』の物語展開より前の時点に書かれた、だから、まだ英雄への未練を捨て切れない姿が描かれている、とされてきた。しかし、他には見られない第12歌の特徴の1つに、冒頭では名宛人への挨拶が置かれず唐突に始まるということがある。これに対応して結びも含みを多く残して急に切り上げた印象が強い。そこから、これらのことはこの手紙以前にメーディアとイアーソーンのあいだですでになんらかの交渉があったこと、および、その交渉にある種の決着をつけようとする意図をもって手紙が記されていることを示唆するのではないか、という仮説が立てられた。その着眼からエウリーピデース『メーディア』との比較を行った結果、メーディアの恩義の大きさ、それに仇で報いたイアーソーンへの非難、報復の示唆等の対応点から、第12歌のメーディアも復讐をほぼ決意していると推察され、この推察を補強するものとして「怒りの炎」というモチーフの展開が観察された。そのうえで、復縁を願うかのように未練を残していると見える言葉については、それが「怒りより小さい」と言われること、また、それと対比的に手紙が「私の心は得体の知れないもっと大きなことを行う」と結ばれることから、メーディアがイアーソーンに対して、自分が報復に出るとすれば、その責任はひとえに、正当な怒りを抑えて嘆願までした自分を拒絶するイアーソーンが負わねばならない、として交渉打ち切りを宣言しながら、最後通告を突きつけるための前段手続きであると解釈された。

第4章は、トロイア戦争で最初に命を落としたとされる英雄プロテシラーオスに宛てて妻ラーオダメイアが書き送った第13歌を検討した。二人に関する伝承は相互の

強い情愛に一つの焦点を置き、その熱情ゆえに夫が死後に亡霊として一時ながら妻と再会したこと、そのあと妻は夫の似像を作って満たされぬ思いを少しでも癒そうとしたことが重要な筋である。その点で、通常の伝承は夫の死後に物語の中心があるのに対し、第13歌は夫が存命という前提で書かれている。ところが、「再会」については夢の中という形で、また、「似像」も妻が夫の留守の切なさを癒すために作ったという形で第13歌にも用いられる。このことについて、これまでの解釈は手紙の時点でプロテシラーオスがすでに死んでいるかどうかという観点に立っていたが、むしろ、夫の存命を信じて願う妻の情愛を示す表現ではないかという見地から見直した。その結果、冒頭の変哲もなく見える挨拶に夫の無事な帰還への願いが強く打ち出されていること、夢に現われた夫の姿はすでに死んでいるようにも見えながら、同時に、ラーオダメイアの言葉には夫の死を認めようとしないう響きが込められていること、夫の不在の寂しい現実を夫が帰還したときの喜びと対応させながら、帰還が現実となるかのように表現されること、「似像」もそうした表現と連動して夫の無事を実現するかのように語られていることが観察された。第13歌は、この手紙が夫に届くなら自分の願いも言わば天に届いて叶う、そうしたラーオダメイア的心情が託された書簡と解釈された。

以上から、対象とした詩編は4編のみであったが、それぞれに特色ある場面設定のうえに書き手の個性が豊かに描き出されていることを結論とした。

(論文審査の結果の要旨)

オウィディウス『名高き女たちの手紙』は神話の登場人物が思いを寄せる相手に宛てて胸中を記した書簡という体裁を取るエレゲイア詩で、女性の書き手による単独書簡15編と3組の男女による往復書簡の計21編からなる。本論文は単独書簡のうち第4、9、12、13歌を検討対象とする。

作品に対する旧来の理解は、一方で、恋愛エレゲイア詩の伝統に連なりつつ、他方では、特定の状況下でのよく知られた人物の言説を仮想的に綴る点で、古代によく行われた修辞訓練の一つである模擬弁論、とりわけ、説得弁論に依拠するものと捉えた。この見方は、古代から過剰なほどの弁舌を指摘されたオウィディウスの特質を言い当てている反面、技巧が先に立った皮相的な作品という評価につながり、とりわけ、相手の気持ちを自分に向けようと説得するという点ほどの詩編にも共通することから、結局、どれも変わり映えしないという批判がなされた。さらに、そうしたある種の均質性に起因する偽作説がかなりの数の詩編について現れた。つまり、技巧に通じさえすれば誰でも作れるような詩と考えられたのである。

これに対して近年の解釈は手紙の特性とintertextualityに着目して、そこから生まれる表現効果に目を向けている。すなわち、詩人が当該書簡の執筆時点を先行作品における物語展開のどこに置いたか、その設定を見きわめたのちにあらためて詩編を見直すと、それまで見えていなかった様々な暗示、微妙な意味合いが浮かび上がってくる。それはときに書き手の意図を越え、執筆時点以降の物語展開との関係において劇的皮肉をも生む。

本論文もこのような近年の研究の方向を踏まえる。そのうえで重視するのは、それぞれの書き手にどのような人物造形が施されているか、という観点である。書簡には特定の状況における特定の相手に対する書き手の感情や思考が綴られる。そこにはおのずから書き手の個性が表出するはずであり、言い換えれば、それぞれの詩編にそのような理解ができるとき、上に触れた旧来の批判や偽作の疑念に対する答えともなりうると考えられる。近年の研究の重要な基盤をなしたKnoxによる単独書簡についての校訂注釈書(1995)は第3、4、8、9、12、13、14歌を収載しなかったが、そこには偽作の疑問が大きく関わっていた。本論文はそうした状況を変えることを目指している。

このような立場から本論文は、(1)それぞれの詩編について他に見られない形式的もしくは内容的特色を観察する、(2)その観察から出発して、従来より指摘されていた問題に新たな視点を提起する、(3)その視点に立って各詩編の執筆時点をより精密に特定する、(4)この執筆時点を基点に書き手の意図、感情や思考の動きを見直す、(5)以上の検討をもとにそれぞれの書き手の個性ある人物造形を提示する、という手順で考究を進めた。以下、詩編ごとに成果の要点を記す。

第4歌を取り上げた第1章では、オウィディウス特有のアンティクライマックスの表現が指摘された。継母パイドラーが女性嫌いで真っ直ぐな性格のヒッポリュトスを不義に誘う試みはどのようにしても失敗することが、伝承もそうであるように、最初から分かっている。しかし、第4歌のパイドラーは手紙の冒頭でも結びでも「最後まで読み通して」と強調して訴え、ヒッポリュトスが手紙を読みさえすれば自分の説得に応じるかのように、言葉を尽くす。本論文はその言葉が修辞の常套に則ったものであることを確認したうえで、エウリーピデース『ヒッポリュトス』との比較から、言葉の技巧そのものと技巧と密接に関連する有益性の議論にヒッポリュトスによる拒絶の暗示が織り込まれていると解釈した。手紙に記した思いが届かない設定は単独書簡に共通するが、言葉の技巧そのものが説得失敗の原因をなすことを指摘した点が評価される。

第2章は第9歌、夫である不敗の英雄ヘーラクレスの浮気心をあらためさせよ

うとした妻デーイアネイラの手紙を取り上げる。手紙は、しかし、その途中に、媚薬と信じて彼女が送った衣が実は致命的な毒物で、いま英雄が瀕死の状態であるという知らせが入ることから、その前後で大きく様相を変化させる。この急変を本論文は、それまで自分を夫の名声に寄与する存在と自負していたデーイアネイラが夫の名声にふさわしくあるためには夫のあとを追っていますぐ自害する勇気を示すしかないという決意にいたる事態の逆転として捉えた。書簡に似つかわしくないとされるリフレインもこの決意への過程で用いられることで、異常な状況下でデーイアネイラの決意が固まる経過を刻々と辿っていることを示した。

第3章は、助けられた恩義に仇で報いた英雄イアソンをメーディアが非難する第12歌を取り上げた。従来の理解は、手紙に言及される復縁嘆願をほぼ額面どおりにとって、執筆時点をメーディアの英雄に対する復讐決意以前、つまり、エウリーピデースの悲劇『メーディア』での物語展開以前としていた。これに対して本論文は、唐突な手紙の切り出しがすでに二人のあいだでかなりの交渉があったことを推察させること、悲劇『メーディア』との対応個所が観察されること、メーディアの怒りが炎の表象によって展開していること、これらから、第12歌のメーディアも復讐の意志を固めていると解し、復縁嘆願については、英雄の拒絶を見越したうえで、そこまで言っても心が動かないなら、それによって生じる結果の責任はすべて英雄が負うべき、として最後通告を突きつける前段手続きと解釈した。諸伝承においてメーディア像は英雄を助ける純真な乙女と子殺しにまで及ぶ異界の魔女とに激しく分裂しているが、前者のメーディア像も利用しながら、手紙がメーディアの怒りの顕現する直前の瞬間を切り取っていることを示した点が評価される。

第4章は、トロイアに出征し、戦死する運命の夫プロテシラーオスに妻ラーオダメイアが送った第13歌を検討した。諸伝承は夫の死後に焦点を当て、亡霊の身で現れた夫との「再会」と夫への思いをつなぐ「似像」とを主要モチーフとして、死も絶つことのできない二人の夫婦愛を語ろうとする。それに対し、第13歌は、それら2つのモチーフを用いながら、夫存命を願い、あくまで信じ続けようとするラーオダメイアの情愛を浮き彫りにしている、という理解を本論文は提起した。諸伝承では、死という絶対の障壁を越えて思いが届くところに物語の中心があったのに対し、第13歌は、無事を願う手紙が夫に届きさえすれば夫の帰還も果たされると信じる姿にラーオダメイアの強い愛を表現した、とする解釈は説得的である。

このように各詩編に意義ある解釈を示した成果の一方で、本論文には、議論が性急にすぎ、十分に手順を尽くしていないと見られる場合や、言おうとすることを適切に表していないと判断される言葉遣いが散見される。また、全21歌のうちの4編のみを対象としたことは、各詩編の多様な個性を見出す可能性を示したとはいえ、詩集全体に十分な目配りをしたとは必ずしも言えない。とはいえ、本論文の方向性が作品理解に資することは確かと思われ、今後に期待できるところは大きい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。